

ふりむけば、童句碑 広沢一岐

『童句への誘い』と題する狭山台公民館主催の講演会で、私は〈童句のまち・狭山市〉と称されるに至った日々をふりかえつてみました。去る一月二十八日のことです。

この講演会は、童句振興協会の中核として活動してきた狭山童句研究会（渡川誠会長）が、昨年秋、埼玉県知事から『文化ともしび賞』を頂いたことにちなんで企画されたものでした。同会は、昭和六十一年の結成以来、童句づくりに励んできた二十五年間の実績ばかりでなく、二十回に及ぶ全国童句まつりの事務局としての功績、狭山台の大通り街路灯への童句展示等の尽力が認められたものです。



智光山公園子ども動物園にある童句碑

地元の文人としては、かつて私が〈茶の花や歌は淳行句は柳〉と詠んで顕彰したアララギ派の大河原淳行さんは柳二と詠んで顕彰した今坂柳二さんが、活躍中です。農民俳句で名を成した今坂柳二さんが、活躍中です。

文学が輝いていた時代が長く続いていましたから、私たち童句作家の卵も、この国の児童文学の中で確かな位置を占めたいとがんばったものです。しかし、満ちれば欠くるの習いで、いつしか勢いを失つていふことになりました。主たる因は、会員の高齢化です。

しかし、陽はまた昇るも世のならいです。ふりむけば、スタートの日々がよみがえります。土家先生は、文学碑建立を周辺からすすめられた時、『かわいそつなぞう』に連なるものでなく、童句碑を希望されたと伺いました。この件については、また書くこともあるでしょう。

童句碑は、狭山市の宝です。いま、私の思いも智光山公園子ども動物園前に建つ、あの象に似た石碑へとつながっていきます。

童句碑には、土家先生の五句が刻まれています。

あらそつて たこおろす空 雪となる

トラックの 土にたんぽぼが 哭いて行く

宿題の 窓にときどき 遠花火

雨に鳴く こおろぎに ドアあけてやる

ひなたぼこ しながら母に 髪刈らる

グループがあり、全国の童句界の機関車の役割を果たしていました。現在は、童句振興協会に統一されていますが、当時から狭山市には童句創始者である土家由岐雄先生ばかりでなく、孤高の詩人といわれる吉野弘先生、劇作家である児童文学者さねとうあきら先生。後に知つたことですが、芥川賞作家の大道珠代さんも市民でした。

編集後記

野菜作りが好きで、幸い近くを広く借りられ、暇があれば畑に出る毎日。冬には道路の落葉を集め堆肥作りも今年は何故か簡単に集められた。放射能が心配で止めた人がいたらしい。狭山茶も田舎に送るのを止めたとか。

この寒さで、今年の桜はどうなるか。「桜まつり」は満開の桜の下で楽しむやりたいもの。芸術祭も好評でしたが、紙面で感じとれれば幸いです。

（高沢正夫）